

佐々木鴻基氏旧蔵の小山秀関係資料について

倉田 法子

一. はじめに

小山秀関係資料は、天草出身で幕末から明治にかけて長崎の外国人居留地を中心に建設業で活躍した、小山秀之進（明治以降、秀と称す）に関係する資料群で、平成二三年（二〇一一）に佐々木潤子氏から長崎市に寄贈されたものである。本資料の一部は、小山秀之進に関連する先行研究や調査報告書などで紹介されているところであるが、紙資料以外の道具類や器物類も含めた資料群全体について対象とした紹介・報告はなされていないため、今回、どのようなものが今に伝わるのか、それぞれ紹介したい。なお、名前については明らかに江戸時代と思われる際には、秀之進と表記し、それ以外を秀と表記している。

（一）旧所蔵者及び資料発見後の経緯

旧所蔵者は、小山秀の故郷である熊本県天草市五和町御領に所在する浄土真宗浄専寺の住職であった故佐々木鴻基氏である。寺の改築の折に資料を発見し保管していたという。浄専寺は、小山家代々の菩提寺である。

山口光臣は『長崎の洋風建築』のなかで、小山秀関係資料の発見の様子を記述しており、それによると、昭和四〇年（一九六五）二月、カトリック大浦教会一〇〇年祭に際して、日本二十六聖人記念館館長のパチエコ・ディエゴ神父（結城了悟氏）が天草で調査を行っ

た際に発見された、と紹介している²。発見当時、彼（小山）が使用していた「道具箱」の中に、建築工事の設計図一枚、外国人との契約書三通、若干の測量道具が収められていた、という。

程なく資料は、昭和四一年（一九六六）八月一日に開館した本渡市立天草切支丹館に寄託され、一部は同館で展示公開されたが、平成一八年（二〇〇六）から同二二年（二〇一〇）にかけての切支丹館のリニューアル工事に伴い、佐々木家に返却された。

その後、佐々木家より、縁が深い長崎市で本資料を役立ててほしいとの申し出があり、平成二三年長崎市に寄贈されるに至った。

（二）小山秀関係資料を掲載している書籍

小山秀関係資料については、すでに長崎の洋風建築に関する書籍等で一部の史料が紹介されており、翻刻や解説、分析が加えられている。それらについて主だったものを挙げる。

前述した、山口光臣『長崎の洋風建築』においては、資料の概要が紹介及び解説されている。このうち、旧オルト住宅平面図は写真が掲載されているほか、契約書三通は英文が活字化されており、うちグループとの工事契約書は和訳文を掲載し、建築工事の請負内容を整理している³。

桐敷真次郎は『大浦天主堂』において、現存している資料のうち一番古いものとして、グループとの契約書の写真（部分）を掲載している⁴。

また、本資料は国指定重要文化財の修理報告書で活用されている。『旧グラバー住宅修理工事報告書』において、グラバー住宅の工事請負人を小山秀之進と推測するなかで、参考資料として、グループとの契約書の写真（表裏）と和訳文、サイゴン米に関する契約書写

真と和訳文が、それぞれ紹介されている。⁵ また、『旧オルト住宅修理工事報告書』において、オルト住宅平面図（表裏）が掲載され、図面に記載されている内容の分析と現存建物との比較検討等が行われている。⁶

このほか、北野典夫が『天草海外発展史』において、小山秀の生涯を記述する中で、器物資料の写真を掲載している。⁷

二・小山秀（秀之進）について

長崎の外国人居留地造成や西洋建築等に携わった小山秀之進や兄北野織部を含めた先行研究について主だったものについて触れる。長崎の外国人居留地の成立経緯や造成については、菱谷武平の一連の研究成果がある。⁸ 今日、大浦天主堂建築における小山の関わりはよく知られているが、これは前掲の『大浦天主堂』など桐敷真次郎の研究に負うところが大きい。また、北野典夫は天草及び長崎奉行所関係の史料を用いながら、天草や長崎での活躍を幅広く扱い、秀之進を含む小山家の歴史を明らかにしている。⁹ このほか、山口光臣は、資料を用いて長崎の洋風建築と小山の関係を通じ、初期洋風建築における日本人の役割・評価等について論じている。¹⁰

小山家は、天草下島北部東岸の御領大島を拠点とする商家である。近世初期に唐津及び天草を治めた寺澤廣高に仕え、島原天草一揆後、天草で帰民したとされる。宝暦・明和の頃、大嶋浦の清兵衛一族が、長崎の中国貿易によって財を成し、経済力を高めたといわれており、小山家では、清兵衛を第一代の祖としている。その後も、初代から三代にかけて頭角を現し、鉄物・呉服などの商業活動、廻船業の活動、金融業などの活動を盛んに行い、大地主となっていた。加え

て、安永年間には、不作飢饉の折、物資や資金等を供出した慈善事業を行ったことが認められ、褒賞と永代苗字を許されている。ここから、小山姓を名乗り、四代目となる勝定から、当主は代々清四郎を襲名している。さらに、嘉永六年（一八五三）頃、御領組大庄屋を任された時期もあったという。

さて、幕末の小山家は、五代目清四郎時雍の子世代が活躍した。小山秀は、文政十一年（一八二八）、時雍の子、男女合わせて三人兄弟の末弟として、天草郡御領村に生まれた。名前は秀之進とい、明治以降に秀と称した。

秀之進の兄弟のうち、三男正泰は天草上島の赤崎村庄屋北野家の養子となり、北野織部と名乗り、長崎の外国人居留地の造成工事を請け負った。小山家でも、小山社中、小山兄弟商会の形をとり、長崎の江戸町に拠点を置いて、居留地での土木・建設業を展開している。当主は四男良輔（八代）¹²が務め、五男政七郎は会計、七男芳三郎は木材その他資材購入及び運送面を担当、そして末弟の秀之進が渉外にあたり、洋風建築や土地の整備などの建設を請け負っている。このように小山家は幕末の開港場となった長崎を舞台として、外国人居留地の土地・建物の整備において活躍した。

兄織部に続き、長崎にきた秀之進（小山社中）は、フランス人宣教師フューレ神父より、南山手乙一番地の大浦天主堂の建設を請け負い、元治元年（一八六四）末に完成させている。¹³ また、文久三年（一八六三）に造られた南山手三番地のグラバー住宅の建築に携わったとされ、その近くに位置する同甲十四番地の敷地にある木骨石造のオルト住宅の建設も請け負ったと考えられている。さらに、建物だけでなく、道路の石畳や土地の整備なども一部請け負っている様子¹⁴が、長崎奉行所の記録（請負人 小山秀之進など）に見られる。

明治に入り、佐賀藩とグラバー商会が合同で長崎港外の高島の炭鉱開発を始めるが、ここに秀も出資者、現地の管理者として携わっており、高島炭鉱の南洋井坑などの請負人としてその名前が見られる。さらに、明治八年（一八七五）には端島炭坑の開発事業も請け負ったが、炭鉱の厳しい環境における暴動や崩壊など困難が続いた。負債を抱えた秀は、炭鉱経営を手放し、明治一六年（一八八三）頃には、故郷・天草へ戻った。

天草に戻ってからも、三角西港の築造に関わるなど、建設工事に携わったと見られる。晩年、明治三〇年（一八九七）に学校建築を依頼され、学校が完成した明治三一年（一八九八）、七十一歳で亡くなった。

このように小山秀は、幕末から明治にかけて、外国人と交渉を行うなかで、西洋建築の設計や建築技術などを受容し、在来の工法や技術と組み合わせながら、実現させていった建築棟梁・請負師であった。初期洋風建築の建設を数多く手掛けた先駆者と言えるよう。

三．小山秀関係資料について

長崎市に寄贈を受けた資料は、建築関係の図面一一枚、外国人との契約書三通、書簡（断簡）

整理番号	資料名	材質		年代	数量	法量(mm)	備考
1	F・A・グルーム建築工事契約書	洋紙	ペン書	1861	1	322 × 204	虫食いにより破損大、両面記載 「小山良輔」署名捺印
2	大浦 23 番 Pan Ring building 拡張工事契約書	洋紙	ペン書	1864	1	242 × 398	2つ折、「Maltby & co.」サイン、 「J WHATMAN 1859」透かし字あり
3	サイゴン米船荷契約書	洋紙	ペン書	1870	1	252 × 202	
4	大浦 33 番倉庫平面図	厚手洋紙	ペン・墨書	1864	1	250 × 403	「C ANSELL 1862」透かし字あり
5	旧オルト住宅平面図	厚手洋紙	ペン・墨書	1863 ～ 1865	1	225 × 350	表平面図、裏凡例等、朱書あり、 「C ANSELL 1863」透かし字あり
6	手摺り子図面	洋紙	鉛筆、墨書	1860 以降	1	252 × 397	二つ折、虫食いにより破損大、表手摺り子図・ 建物立面図、裏面も記載あり、 「JOYNSON 1860」透かし字あり
7	洋館くり型デザイン図	厚手洋紙	鉛筆、墨書	1862 以降	1	250 × 403	「C ANSELL 1862」透かし字あり
8	住宅平面図	洋紙	ペン・墨書		2	254 × 279 190 × 90	劣化により破損、表建物平面図、裏金物図か
9	壱番石蔵図面	洋紙	ペン・墨書		4	253 × 137 244 × 65 242 × 80 251 × 138	劣化により著しく破損、石蔵平面、立面
10	建物平面図、立面図	厚手洋紙	ペン・墨書		1	250 × 385	表寄棟平屋建物平面図、立面図 裏切妻 2 階建物平面図、立面図
11	平屋建ベランダ付建物立面図	洋紙	ペン書		1	242 × 350	裏面平面図あり
12	建物平面図	和紙	鉛筆、墨書		1	242 × 292	虫食いにより破損大、 表裏面とも建物平面スケッチ記載あり
13	学校建築平面図、構造図、断面図	和紙	鉛筆、墨書 鉛筆		2	442 × 331 139 × 285	大きい図面は 2 つ折
14	2 階建物平面図、断面図、 立面図（スケッチ）	和紙	鉛筆、墨書		1	324 × 408	表平面図・断面図、裏立面図・凡例等
15	書簡（断簡）	和紙	墨書	年未詳 11 月 4 日	3	155 × 367 155 × 321 155 × 94	芳三郎から小山家当主あての手紙、 部分的に欠損
16	方位磁針	木製			1	直径 121 総高 55	蓋付き、裏墨書あり
17	測量道具	金属製			3		円分度規と指物、小植型の先端釘
18	ノギス	木製			1	全長 125	
19	雲形定規	木製			6		
20	脚付きガラス杯	ガラス製			1	高 150	木製箱入りか、脚底部に欠あり
21	カップ	ガラス製			1	高 87	
22	ギヤマン五色玉燭一對	脚・枠等木製、 火舎ガラス製			1 対	高 545	組み立て式、一部ガラス欠失、木製箱

表 1 小山秀関係資料目録

一通、道具類四件、器物三件である。すでに他報告によって紹介されている資料については、それらに拠りながら、全体を紹介する。紙資料については、寄託された際に整理して付されたと思われる番号とキャプションがつけられていた。今回、それらを参考にしつつ、資料全体を再整理して改めて資料番号を付した。

資料一から資料三であるが、これらは外国人との間に結ばれた契約書で、筆記体の英文で書かれている。資料四、資料一四は、建築関係の図面である。建物の平面図や立面図が主であるが、部分的な記載やメモ、スケッチのような簡易なものも多い。資料一五は七男芳三郎が当主へ宛てた書簡で断簡となっている。資料一六から資料一九は測量や製図道具類と思われる。資料二〇から資料二二はガラス製の器物で、由来がわかるものは附属していない。

【資料一】 F・A・グルーム建築工事契約書

文久元年（一八六一）に小山良輔（秀之進の兄、八代当主）とフランシス・エー・グルームとの間に交わした工事請負契約書である。グルームはグラバー商会の創設者の一人で、同会員である。英文の翻刻と和訳文がそれぞれ前掲書籍にて紹介されている。¹⁵ バンガロー（木造小型住宅）や料理室、附属屋などの建築工事の請負である。バンガローは一番から三番の図面に従って建てるようにとあり、使用する尺度はフィートを用いることとしている。ほかに建築の仕様や建具の指定や支払方法などを記す。外国人の施主と日本人施工者との間の請負契約の概略を知ることができる。

【資料二】 大浦二三番 Pan Ring building 拡張工事契約書

元治元年（一八六四）長崎において締結されたモルトビー商会と

ドゥーリー・アスキーとの間の請負契約書である。洋紙には「J W H A T M A N 1859」の透かし字が確認できる。¹⁶

敷地「Lot 23」（大浦二三番地）にある茶製所を拡張する工事で、長さは既存と同じで、幅を一八フィートにするというもの。工期や支払いについても記載される。外務課の『外国人名員数書』（文久二年一〇月より慶応元年まで）によると、文久三年（一八六三）より、大浦二三番をモルトビーが借地している。¹⁷

近年翻刻文とともに紹介された、天草市の北野家が所蔵する史料「子年中長崎出張所会計目録」に支払い記録があり、中山圭は、大浦二三番のモルトビー茶製所を小山が手掛けたと推測している。¹⁸ 契約書中には小山の名は出てこないが、秀の手許に残されていたことや、目録中の支払い記録からも小山が大浦二三番のモルトビー茶製所に関する工事に関わっていたことは明らかである。目録は元治二年（一八六五）正月のものであり、本契約書通りに工事が完了していれば、この拡張工事に関する支払いである可能性も高く、ドゥーリー・アスキーの下請けで小山が工事に携わっていたことが推測される。資料の和訳文については後掲する。

【資料三】 サイゴン米船荷契約書

明治三年（一八七〇）にグラバー商会が小山と取り交わしたサイゴン米積荷の略契約書である。英文の翻刻と和訳文がそれぞれ前掲『長崎の洋風建築』及び『旧グラバー住宅修理工事報告書』において紹介されている。¹⁹ サイゴン米を船で輸送することに係る請負で、前納金や保証金についても簡単に記している。

小山秀はこのころ、グラバーとともに高島炭鋳の経営にかかわっており、グラバーとは密接な関係にあった。

【資料四】 大浦三三番倉庫平面図

墨書で「大浦第三十三番」の地番と、「文久四年三月八日 四枚内巻番」の日付と「小山」の名が記載されている。洋紙で「C A N S E L L 1862」の透かし文字が見られる。²⁰

資料は、敷地内の建物配置と平面図がペン書き、寸法などの文字情報を墨書しており、他に少し薄い鉛筆の線は既存の建物平面図より小さく書かれている箇所があり、長さはフィートで表記している。

図面を見ると、敷地奥（東側）に茶製所があり、建物のアウトラインが途中で描かれている。敷地手前（西側）に土蔵一棟と柱間を表記した平面図の建物が二棟東西方向に並ぶ。建物の寸法、敷地境界と建物の距離、北側周囲に土手塀（漆喰塀か）が配されていることなどを記載している。

「長崎居留場全図」（慶応二年）を見ると、大浦三三番地は甲・乙・口と土地を三分割されている。また「梅ヶ崎大浦下り松居留地図」（明治三〜四年頃）では、三三番地は二分割に表記されており、「甲三十三番地」の敷地の形状が、本資料のものと似ている。²¹この地図に記載されている建物配置では、土蔵と二棟の建物が類似しており、茶製所があった場所は二階建ての建物と附属屋などの別棟の建物が描かれる。

『外国人名員数書』（文久二年一〇月より慶応元年まで）を見ると、文久二年（一八六二）の段階で三三番に茶製所を造作中とあり、文久三年（一八六三）までその記載が続く。借地は葡国人ローレイロとある。元治元年（一八六四）正月の調べでは、ローレイロ借地住居となり、所属の中国人の名前も見られる。しかし、同年三月には、

英国人デントの借地となり、「右同断（未タ建家不仕候）」の状態であった。続いて、同五月以降の調べでは、デント借地住居となり、中国人の名が記載される。その後、ロイス所属の中国人の名前が複数名確認され、おそらく茶製所として稼働していたと思われる。

小山が大浦三三番地に関係したのは、ちょうど借地人がデントに代わった頃と思われる。既存の建物もあるなかで、追加の建築物を依頼されたものと推測する。

【資料五】 オルト住宅設計図

長崎市南山手町に現存している国指定重要文化財旧オルト住宅の設計図である。洋紙には「C A N S E L L 1863」の透かし字が見られる。

主に建物の寸法や部屋の用途、建具などの情報が書き込まれており、外国人の施主の原案（ペン書き）に墨で書き込みを行っている。さらに朱書きの記載もあり、細かいところで修正を入れている様子がうかがえる。

本資料は『旧オルト住宅修理工事報告書』において、図面の記載内容を英字記載と和字記載に分けて比較し、分析されている。規模は原案寸法より付記寸法は若干小さく、ベランダの列柱や出入口などの開口部の位置にも多少の相違が見られ、実施にあたり変更されたものと推測されている。また、当該図面は主に建具の情報に特化していることから、当該建物の建築にあたっては、複数枚の図面が存在していたと思われる。

【資料六】 手摺り子図面

手摺り子は、手すりや欄干の笠木を支持する柱状の装飾的構造の

もので、洋風建築の階段やベランダの手すりによく見かける。洋紙で「JOYNSON 1860」の透かし文字が見られるため、一八六〇年以降のもの²²。

両面に記載が見られ、手摺り子や建物立面、片面には数字やスペル、スケッチが散らし書きされている。このうち、手摺り子は、中心線を入れて、横軸や縦軸の補助線を引き、曲線を描いている。紙面上の手摺り子の長さを測ると、約三七・五cm（一尺二寸程）となり、原寸大のスケールであろうか。図面としては練習やメモ書きといった印象を受ける。

【資料七】 洋館くり型デザイン図

洋紙に「CANSELL 1862」の透かし字があるため、一八六二年以降のもの。縦軸と横軸の補助線を引いて、装飾の曲線である練型の断面デザインを描いている。墨書で取り消し線も見られ、各部分の高さなどの寸法を書き入れている。図面に記載の寸法を足すと総延長は約六六・三cmとなる。デザインの横に「中桁」「中桁面」とあり、取り付け位置がわかる。周囲に全体を描いたスケッチと思われるものが書き込まれているが、柱のようにも見える。

【資料八】 住宅平面図

年未詳、建物の平面プランを描く。敷地に合わせてあるのか、不整形で複雑な形状をしている。一部、朱書で建物平面の修正と思われる線が描かれている。紙が欠損しているため全体は不明であるが、裏面には円形と長方形を組み合わせたような金物と思われる図が描かれている。

【資料九】 壱番石蔵図面

年未詳、洋紙が劣化しており四片に分かれている状態であるが、突合させて元の状態に組み合わせることが可能である。紙面中央に平面図、左右に石蔵の長辺面の立面図が配される。図面をペン書き、寸法や取り消し線を墨で書く。建物は、瓦屋根、石壁で開口部二カ所、正面の窓は石組、背面の窓は格子がはまり、床は石敷とみられる。内容は、長辺七八尺と短辺三八尺の寸法であったものを、長辺六〇尺に変更するものである。既存平面図に墨で線が引かれ、変更の長さが書き込まれている。立面図では縮小する位置の窓に取り消しの印を付けている。

石蔵の所在または計画された場所はどこであろうか。壱番を地番とすると、居留地内であれば出島か大浦に絞られるが、「梅ヶ崎大浦下り松居留地図」(明治三〇四年頃)に描かれる建物配置を見ると、大浦一番地に石造倉庫の表記があり、同所の可能性が考えられる。しかし、壱番が、地番ではなく何番目の石蔵というような建物の名称を表している可能性も考えられるため、現時点では推測の域を出ない。

【資料一〇】 建物平面図、立面図

年未詳、厚手の洋紙に建物の平面図と立面図が描かれる。建物は瓦葺屋根、基礎石を三段積み、軒下の高い位置に半円の開口部を設ける。壁は特に表記がなく、また省略を示す線もないため、漆喰壁を表していると思われる。基礎石を除いた壁の高さは一六尺とある。平面図に寄棟造りの屋根形状を示す線が描かれており、床は板敷きのようである。立面図は妻側が描かれ、朱書きで建物を延長する線が書き込まれる。

本資料は両面に記載があり、片面は鉛筆でバツ印がつけられている。消されている方の図面は瓦葺屋根の土蔵で、前面に屋根を付けた石敷きの通路を配す。

【資料一】 平屋建ベランダ付建物立面図

年未詳、洋紙で両面に記載が見られるが、片面に平屋建て、アーケードのような柱とアーチに囲まれたベランダを表した立面プランが描かれる。

片面には長方形を組み合わせた平面プランにアラビア数字のみ書かれ、他にも周囲に数字が見られるが、全体的にメモ書きのような感じである。

【資料二】 建物平面図

年未詳、墨と鉛筆で建物の平面が描かれているが、フリーハンドで書かれているため、スケッチもしくはメモ書きと思われる。寸法はフィート尺ではなく、一間半や三間とあり、日本在来の考えによって書かれていると思われる。

【資料三】 学校建築平面図、構造図、断面図

年未詳（一八九七年頃か）、二階建ての建物の平面図、構造図（軸組図）、断面図が描かれる。小片の紙がともにあり、平面図には鉛筆で部屋の用途が書き込まれている。図面の線はペン書きのようであり、寸法などを墨書している。平面図には柱の表記があり、部屋の出入り口は開き戸をつけることがわかる。

小山秀は明治一六年（一八八三）以降、郷里の天草に戻り、さまざまな事業を手掛けるが、晩年の明治三〇年（一八九七）、北野家

の地元赤崎村小学校の校舎建築を終えたのち、天草上島の大浦村で天草第三高等小学校の建築を請け負っており、本資料はこの時の学校建築のものではないかと推測されている。²³

部屋の用途を見ると「第一教場」と「第四教場」、「音楽及器械教場」「教員室」があり、小片の紙に書かれた平面図に「第二教場」「第三教場」、「女子裁縫室」と「女子教場」が配置されていることがわかる。建物の平面プランは中央に階段があり、前面（建物正面側か）に廊下、教室を左右対称に配置している。廊下側は南を向いている。各角地には戸袋が置かれ、戸を何枚収納するかを書く。

また、断面図を見ると基礎から軒までのそれぞれの高さなどがわかる。例えば、柱の総延長は二丈二尺五寸、各階の天井までの高さは九尺というように書かれている。

【資料四】 二階建建物平面図、断面図、立面図

年未詳、表面に二階建ての建物の平面図、断面図を鉛筆書き、寸法を墨書し、裏面は、立面図と平面図のスケッチを鉛筆で、材木の仕様を墨書している。所々に鉛筆でメモ書きが見られる。

建物は柱高（地伏木下より軒桁上まで）二丈二尺で、各階の天井高を見ると、一階を八尺三寸、二階を八尺八寸とする。表面の平面は中央部分に一間幅の廊下と三間×三間半の部屋を配置し、左右に五間×三間半の同じ広さの部屋を置く。裏面の平面図は中央に廊下があり、左右の部屋は対称に配置されるプランとなっている。部屋の寸法は書いていないが、柱間の表記を見ると、資料一三の平面プラン及びサイズと同規模となっており、似る部分も多いが、関連するものかどうかは不明である。

裏面の材木の仕様は、中桁杉や手摺地伏杉、手摺木杉など九種を

記載し、寸法と量などが書かれている。

【資料一五】 書簡(断簡)

(年未詳) 一月四日付、芳三郎(五代小山時雍の七男)から小山御家主高兄(小山家当主)あてに出した手紙である。冒頭部分と途中が欠損しているため、内容は途切れ途切れとなっている。

近々、津留されるかもしれないという内容や、材木を調達する見込みであること、また自分が病気になる養生していることなど、諸々よろしく取り計らってほしいと、近況報告を認めている。小山社中のなかで、芳三郎は木材その他資材購入や運送面を担当していたとされ、長崎で活動していたところと仮定するならば、八代当主小山良輔にあてたものと思われる。ただ、秀の手許にこの書簡が遺された経緯は不明である。

【資料一六】 方位磁針

南波松太郎「和磁石」によると、和磁石の定義を、木製のクリ物で、方位は十二支の文字により、磁針は独立支持されているものと整理し、用途によって二種あるとしている。²⁴和磁石の構造は、木地屋造りの蓋物で、台盤と蓋の二部からなっており、台盤の中心にある円形のくぼみに、磁針を納めている。このくぼみは針座と呼ばれる。

本資料は、木製の円筒型で蓋が付いている。円筒の直径一二・一cm、蓋をした状態の高さは五・五cm。蓋は開け閉めがきつく、隙間なく締まるような造りである。蓋の表には三重の同心円が彫られ、蓋裏には「北合丸■(子カ)」と墨書されている。針座の内面は、白く塗った紙を貼っており、底には十字に線が引かれ、北と西の文字が確認

できる。底の中心には細く尖った金属製のピンが立ち、磁針を支えている。磁針は矢形の扁平な薄い金属製の板で、重心のところで「へ」の字形に少し曲がっている。針座は透明なガラスがはめ込まれ、その縁には金属製の細い針金を擦ったもので固く抑えられている。

台盤に記される方位は、十二支を周囲に彫って表している。干支の文字の両脇に区分する線が刻まれ一二分割されるが、文字の中心にも二等分割の線が入っているため、二四の方位表示となっている。彫られた文字は白く塗ってあり、「子」の字のみ朱塗りしている。この盤面の方位表示は、いくつか種類があるようであるが、方位が細かいものは明治以降に見られるとあり、本資料は江戸時代後期に国内で流通しているものと推測される。なお、現在も磁針は北である「子」を指す。

【資料一七】 測量道具

三点とも黄銅製。資料一七一は、円分度規と思われる²⁵、直径一二・四cmの円形(ドーナツ形)で、中に十字のバーが入りその中央が開く。さらに中心に小さい穴が開いている(全円儀などの中央にある小さな穴と同様と思われる、目打ち釘を刺し盤面に固定するものと推測する)。円周には十二支が時計回りに記載されている。十二支の各区割りの中は三〇目盛に細かく線が引かれている。資料一七一二は先端中央が空いた円から長方形の棹状のものが伸びる。円分度規に取り付ける金指物のようであるが、目盛は確認できない。「金子」(文字右側すれで消えている)と印がみられる。

円分度規の中央の突起部分がネジ式になっており、回すと上部が外れる。そこに資料一七一二の円の部分がはまり、再び外した上部をしめると、ちょうど半円の部分が円分度規の周囲の曲線と合う。

資料一七一三は小槌形で先端は釘状に尖っている。目打ちの釘と
思われたが、円分度規の中央の穴にははまらなかった。円分度規と
関連するものかは不明であるが、これまで一括して紹介されている
ので、今回もここにまとめておくことにした。

【資料一八】 ノギス

木製、全長一二・五cm、副尺をスライドして挟み込んでサイズを
測る計測道具。目盛の長さは七・五cm、一目盛は三mmである。本資
料は既存の目盛から延長して、本体の木部分に目盛を追加させた
と思われる刻みが確認できる。追加分は三cmであった。

ノギスは滑り挟み方式で対象の厚さや径などの寸法を測定する工
具である。ノギスはバーニヤ目盛があるものとなないものがあり、な
いものは簡易ノギスと呼ばれている。国内では幕末頃に黄銅製のも
のが確認されているが、それとは異なり、江戸時代末に長崎や浦賀
を通じて入った、あるいは明治時代初期に入ってきたと思われる簡
易ノギスを模倣し、木製の簡易ノギスが作られてきていたとされる。
バーニヤ目盛をもたない滑り挟み尺は、玉尺とも呼ばれていたよう
で、製作の多くは明治時代のものであると推測されている²⁶。どのよ
うな経路で入手され、実際にどこで使用したかは定かではないが、
洋風建築に携わった小山の所蔵品として興味深い。

【資料一九】 雲形定規

木製。六枚あり、それぞれ形が異なる。そのうちの一枚に和紙で
値札が貼られており、朱色のスタンプで、「博多勤場 正札 金六銭」
（六銭は墨書）と書かれている。販売元をたどることができず、い
つ頃のものか不詳であるが、明治四年（一八七二）の新貨条例以後

に入手したものと推測する。

【資料二〇】 脚付きガラス杯

高さ一五cm、口径は内寸が八・二cm、ガラスの厚さが〇・二cmであ
った。ガラスの底から側面にかけて花卉のような模様が入る。脚付き
の底の部分は一部欠損している、ガラスには気泡が見られる。本資
料が収められていたと思われる木箱がある。

【資料二一】 カップ

高さ八・七cm、持ち手の下部の付け根がデイジーの花のようになっ
ており、持ち手も数条の溝が入る。口径は内寸七・九cm、ガラスの
厚さ〇・三cmである。

【資料二二】 ギヤマン五色玉燭一對

本資料は、火袋、脚、土台の三つに分解でき、組み立て式になっ
ている。総高五四・五cm、火袋の部分は約二三・八cm、脚部二四・〇cm、
土台は底面が六角形で幅は一五cm。火袋は六角形で上下の六面ずつ
に色付きガラスがはまる。色は、赤、緑、青、橙の四色がある。中
央の灯がとる部分は、花十字の柄が入ったガラスが六面に入る。
内部は蠟の溶けた跡が付着しているのが確認されるため、実際に火
をともして使用されたようだ。本資料を収める木箱が付随しており、
「ギヤマン五色玉燭一對 小山氏」と墨書がある。

四. まとめ

小山秀及び小山社中については、幕府の公的な書類やその他天草に伝わる史料などにより、その活動などを追うことができるが、本資料群についても、それらの活動の内容を補完できるものとして重要である。

契約書や図面については、その活動の一部を示すものであり、図面の多くが日付や作者等を含め特定するに至らないところではあるが、洋風建築の技術や意匠が我が国にもたらされた初期において、外国人からの建築請負にあたり、どのような条件や情報をもとに契約、建設を行ったのかなどの一端を知ることができる貴重な資料と言えよう。また、ペン書き、墨書、鉛筆書きの別、断面図などに記載されている当時の建築用語などの情報を含むものは、今後、建築的な観点から検証することによって、さらに有用な情報が得られる可能性もあるだろう。

道具類については、江戸時代後期から明治時代初期にかけて流通や使用が確認されている製図で使用する測量道具類の一部が伝わっており、当時の建築に携わる者の持ち物として興味深い。由来は判然としないものの、長崎における活動のなかで入手するに至ったと思われる燭台は、色付きガラスや花十字のモチーフなど、特徴的なものであり、キリスト教会堂との関わりも想像される。

近年、古写真など、長崎居留地に関連する新知見の資料も徐々に増加しており、研究の蓄積や新たな史料の解明なども進められつつある。本資料群は断片的ではあるが、関連資料とともに検証が進むことによって、幕末から明治にかけての過渡的な時期における洋風

建築の請負や建設などの様相について、より実態に迫ることができるとはならないかと期待する。今後、小山秀を含め、長崎の外国人居留地及び当時の建築請負の実態の解明に役立てたいと思うとともに、これら資料が現在に遺ったことに感謝したい。

最後に、紙の博物館五十部めぐみ氏、天草市観光文化部文化課中山圭氏、長崎市文化財課宮下雅史氏には、本資料紹介を執筆するにあたり、様々な点でご教示いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

(長崎市文化財課主事)

- 1 平成二三年、佐々木氏の妻潤子氏からの聞き取りによると、小山秀の娘が浄専寺に嫁いだ経緯によって資料が残されたものらしい、ということであった。
- 2 山口光臣『長崎の洋風建築』（長崎市教育委員会、一九六七年）一二四頁。
- 3 山口光臣、前掲2、八九頁〜九二頁。
- 4 桐敷真次郎『大浦天主堂』（中央美術出版、一九六八年）一八頁。
- 5 長崎市「編」『重要文化財旧グラバー住宅修理工事報告書』（長崎市、一九六八年）五九頁〜六二頁。
- 6 文化財建造物保存技術協会「編」『重要文化財旧オルト住宅修理工事報告書』（長崎市、一九七九年）五一〜五六頁。
- 7 北野典夫『天草海外発展史』上巻（葦書房、一九八五年）。
- 8 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』（九州大学出版会、一九八八年）。
- 9 北野典夫、前掲7。
- 10 山口光臣、前掲2。
- 11 小山家については、桐敷真次郎「小山一族」（『大浦天主堂』前掲4）、北野典夫『天草海外発展史』（前掲7）、天草市観光文化部世界遺産推進室「編」『長崎居留地と大浦天主堂を造った天草の兄弟―小山秀之進と北野織部』展示リーフレット二〇一九年による。
- 12 五代時雍以降の当主の代については、前掲11において、それぞれ異なる部分があるが、今回は天草市「長崎居留地と大浦天主堂を造った天草の兄弟―小山秀之進と北野織部」展示リーフレット掲
- 載の系図を参照した。
- 13 請負契約の名義は、当主小山良輔の名で行われている（前掲4、前掲7）。
- 14 北野典夫、前掲7、一六五頁〜一六九頁（長崎奉行所居留場掛「安政六未年九月以来慶應二寅年十二月迄 居留場埋立並御普請向桁付帳」）
- 15 山口光臣、前掲2、九〇頁〜九二頁。前掲5、六一頁。
- 16 一七四五年設立のイギリス・ケント地方にある製紙メーカー、ワットマン社の紙と推測する。
- 17 長崎県立長崎図書館「編」『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿』I（長崎県立長崎図書館、二〇〇二年）。
- 18 中山圭「小山中社に関する新史料―大浦天主堂・グラバー・下浦石」『潮騒』第三六号、天草文化協会、二〇二一年）。
- 19 山口光臣、前掲2、一〇〇頁。前掲5、六二頁。
- 20 品川仁三郎「編」『世界輸出入大観』（日華新報社、一九一八年。国立国会図書館デジタルコレクション）によると、製紙業分野で、Cansell Paper Co.とあり、イギリスのロンドンに所在する製紙メーカーの紙と推測する。
- 21 「長崎居留場全図」立正大学図書館・田中啓爾文庫所蔵。「梅ヶ崎大浦下り松居留地図」デンマーク国立博物館民族誌学部所蔵。（岡林隆敏・林一馬・長崎市教育委員会「編」『長崎古写真集―居留地篇―』、長崎市教育委員会、一九九五年掲載）
- 22 東京書院「編」『日本登録商標大全』第一二輯下（東京書院、一九一五年。国立国会図書館デジタルコレクション）によると、大正七年にJOYNSONが商標登録されており、同社の紙と推

測する。製図用などの紙類を扱うイギリスの製紙メーカーのようである。

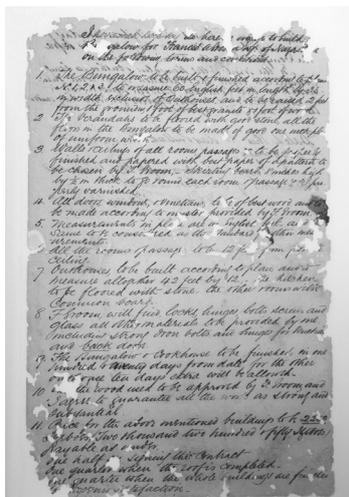
²³ 山口光臣、前掲2、一二五頁。北野典夫、前掲7、二二三頁～二三五頁。

²⁴ 南波松太郎「和磁石」(『和算』第二九号、近畿数学史学会、一九八〇年)

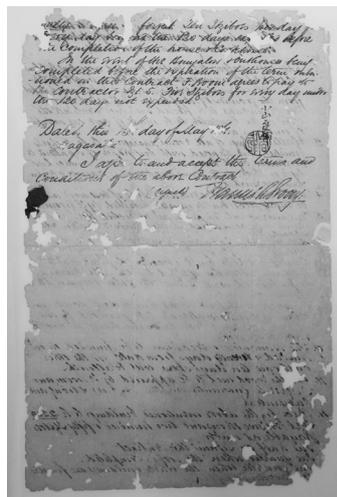
²⁵ 江戸時代後期、測量術が広がり、測量家を輩出するとともに様々な測量器具も普及した。都市部において測量器具の製造者や販売者が知られている。江戸時代後期から明治時代初期にかけて使用された測量器具については、これら製造・販売の引札(広告)に器具の図が描かれていることから知ることができる。測量器具製造を行う大野規周の「地方測量器略図」に円分度規が紹介されており、本資料と同じ形状と見える。また、大隅源助の引札では九文度指金附とあり、目盛が付いた棹状のものが付随する。(山崎孝史「〈研究ノート〉「地方測量之図」小考・絵師はたして北齋か」『史林』史学研究会、一九九四年、掲載資料参照。大谷典久「測量器具商としての大隅源助」『歴史地理学』歴史地理学会、二〇〇九年)

²⁶ ミットヨ『精密測定器の歴史―ノギスの起こりと変遷』カタログNo.三六四(四)(ミットヨ、二〇二二年)。

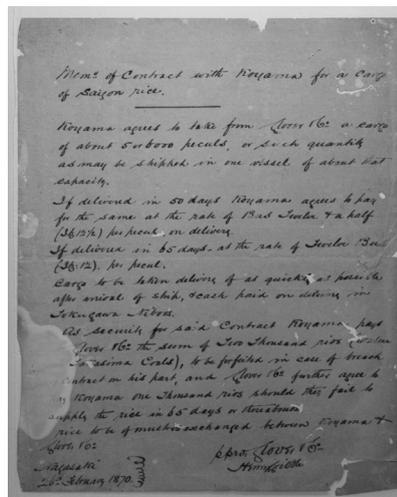
資料1 (表)



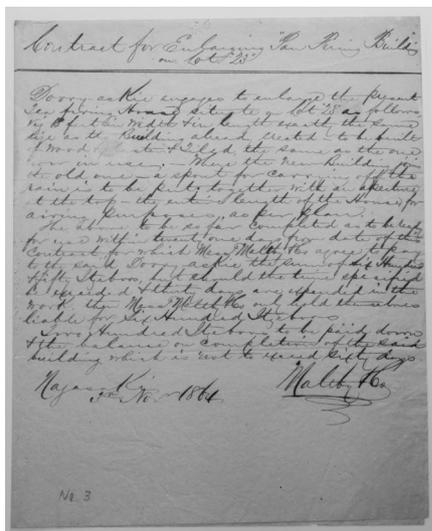
(裏)



資料3



資料2



「J WHATMAN 1859」の透かし文字

<和訳文>

敷地“23”の“パン・リング・ビル”拡張工事請負契約

ドゥーリー・アスキーは、敷地“23”にある現在の茶製所を以下のように拡張することを請け負う。すなわち、幅18フィート、長さは現在建っている建物とまったく同じ大きさで、木造、しっくい仕上げ、新しい建物は現在使用されているものと同じタイル張りにする。現存する建物には、雨水の排水口と、上部に開口部を設ける。

上記工事は本契約の日付から21日以内に使用できるように完成させること。そのために、モルトビー商会は、ドゥーリー・アスキーに650イッツェブス（日本銀）を支払うことに同意するが、指定された期間が30日を超過した場合は、モルトビー商会は600イッツェブスのみを負担する。

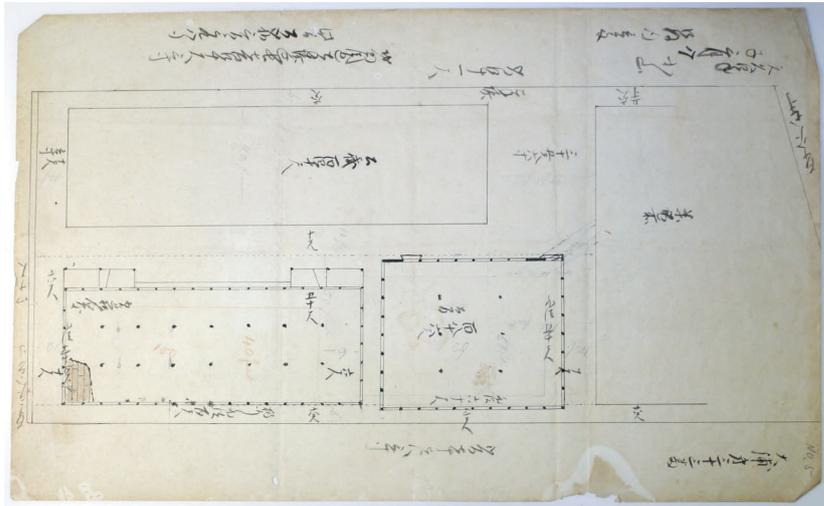
200イッツェブスは頭金として支払われ、残金は60日を超えない範囲での建物の完成時に支払われる。

長崎 1864年11月3日

モルトビー商会にて

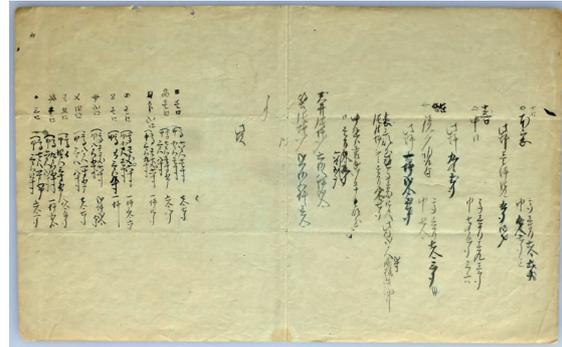
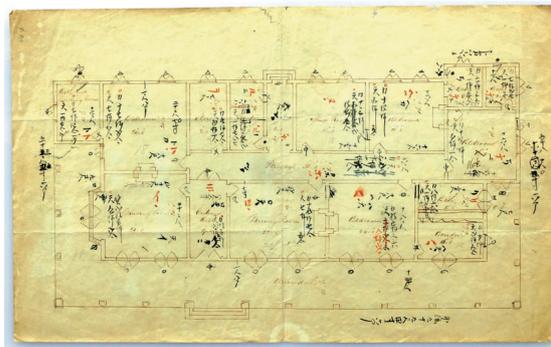
資料4

「C ANSELL 1862」透かし



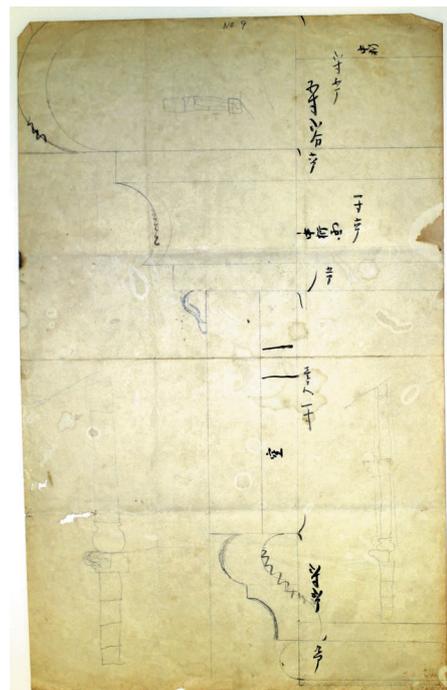
資料5 (表)

(裏)



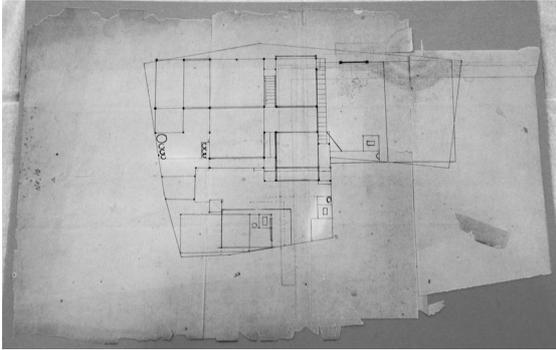
資料6

資料7

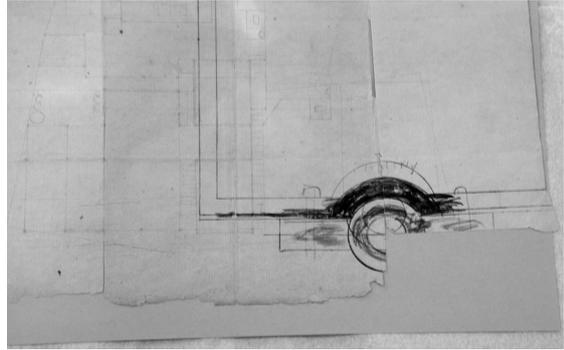


「JOYNSON 1860」透かし

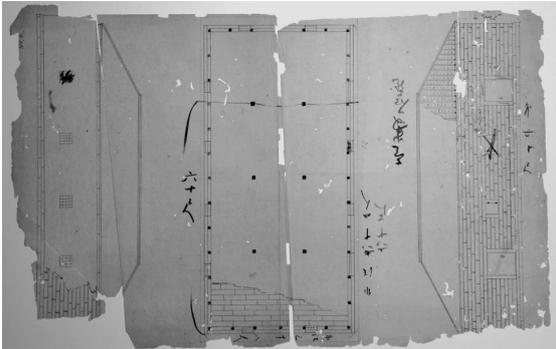
資料 8 (一面)



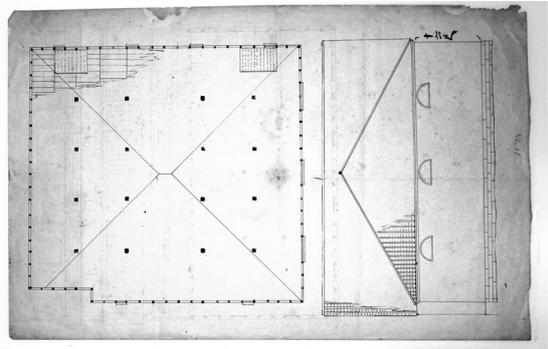
(二面)



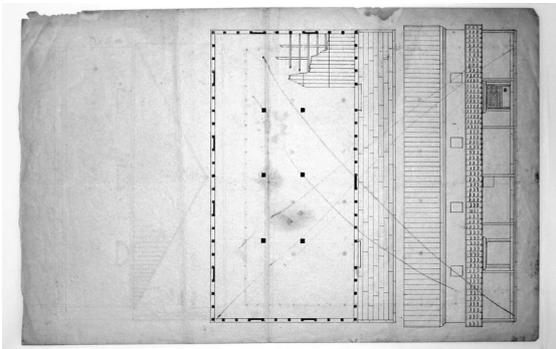
資料 9



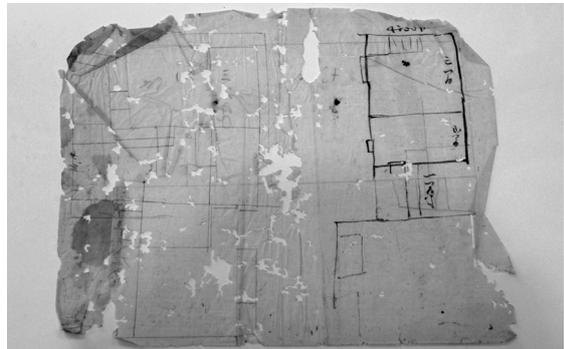
資料 10(表)



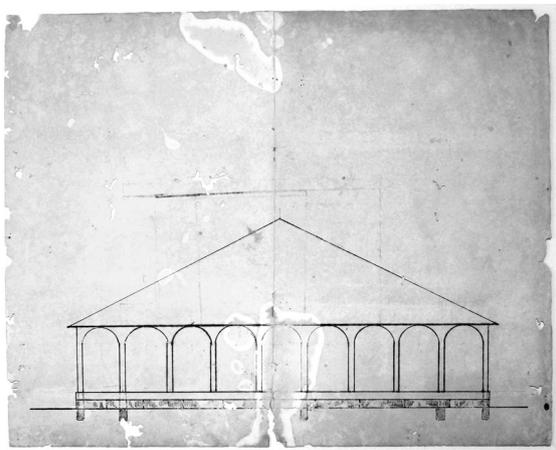
資料 10(裏)



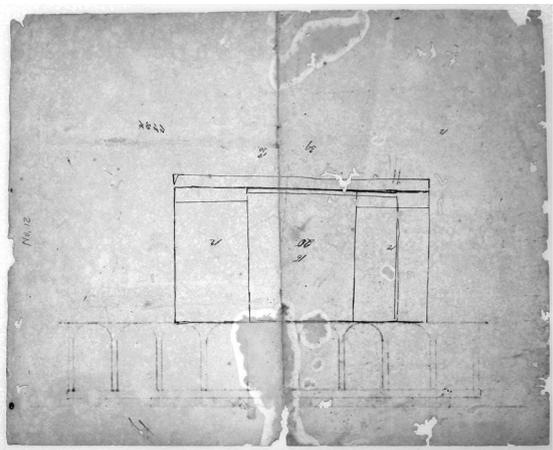
資料 12



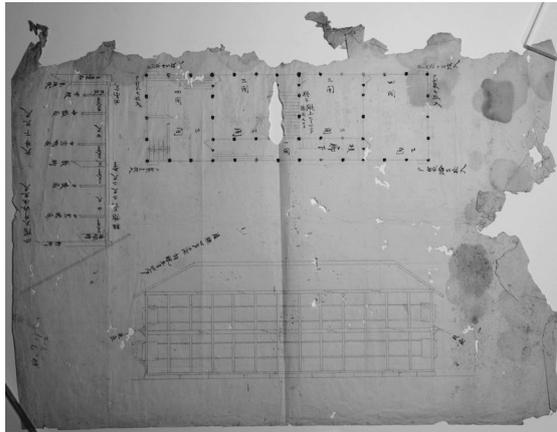
資料 11(一面)



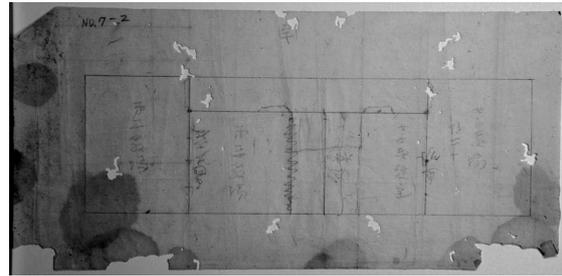
(二面)



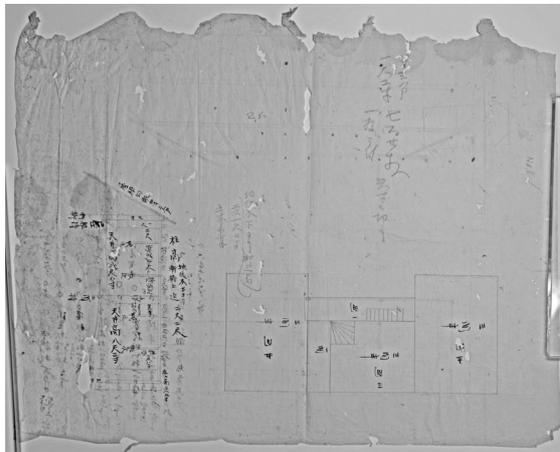
資料 13 - 1



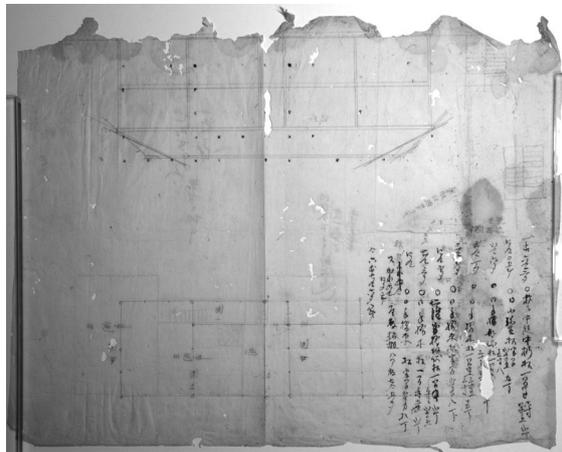
資料 13 - 2



資料 14 (表)



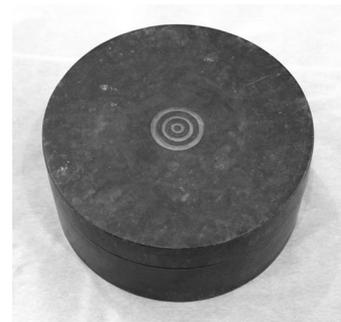
(裏)



資料 15



資料 16



資料 17 - 1、17 - 2



資料 17 - 3



資料 18



資料 19



資料 20



資料 22



資料 21

